

神像と仏像全23体が本殿奥で人知れず眠っていた！

山陰最古級の立膝女神像が 米子市の八幡神社で見つかる

鳥取県米子市の八幡神社で眠っていた23体の神像と仏像。

彫刻史上注目すべき立膝女神像の姿と、人々の信仰の形とは!?

取材文 深谷美和(エディット・プラス)



八幡神社で発見された山陰最古級の立膝女神像

丸みのある顔立ちや唐風の服装・座り方が特徴で、結い上げた髪には墨、ひだの多い衣には緑と赤の彩色が残っている。鳥取県と、隣接した島根県において片膝を立てた状態の女神像が見つかったのは初めてのこと。

に神像・仏像にはそれぞれの時代の流行や貴族の姿が表現されているため、時代による特徴と個性が出やすいんです。遣唐使廃止後に国風文化が花開くと、唐風の服装は十二単へ、立膝だった座り方は正座へと変化していきますから、その変化が起こる以前の姿をしている女神像は、極めて古いと言えるのです」

立膝女神像から長谷教授が見出したのは、彫刻史上の価値だけではなく、当時の人々の信仰の姿、例えば神道と木の間にある強い結び付きだという。

「立膝女神像には大きな亀裂が入っていますが、これは木の芯の部分が体の中心を通っているためです。乾燥しやすい木の外側と、水分を多く含む芯を一緒に使えば干割れが起きてしまうので、通常芯の部分は取り除かれます。作り手はそれを知りながらも、この木を使うことに重きを置き、あえて芯材を取らずに完成させたようです。こだわりから考えると、ご神木であったのではないでしょうが。」

神像はご神体として祀られ、人目に触れることが極めて少ないため、調査できる機会も貴重です。国宝・重文に指定されている神像は全国でも90ほどにとどまり、仏像に比べて今後まだまだ研究の余地や可能性があると云えますね」

日本の彫刻史を支えてきた神像と仏像。今後の研究により、彫刻史上の発見はもちろん、神道やそれを守り伝えてきた人々の姿の解明も期待できそうです。

奈

良時代末期に、仏教や神仏習合の影響で作られた神像。

先日、山陰最古級の女神像をはじめ全23体の神像・仏像が、鳥取県米子市の八幡神社で見つかった。

「宮司さんにより神像・仏像が発見されたのが昨年末のこと。普段は信仰上足を踏み入れない本殿奥の部屋に清掃のため入ったところ、像が納められた4つの木箱に出合ったそうです。その後の調査・

研究を経て、4月15日に一般公開されました」(関西大学文学部長谷洋一教授)

23体の像のうち、女神像や男神像など6体が平安時代中期〜後期の作。中でも

特に古いのが、高さ約52センチメートル、クスノキの一木造りの立膝女神像だ。

「古いと判断した理由は、唐風の服装や片膝を立てた座り方にあります。一般的